

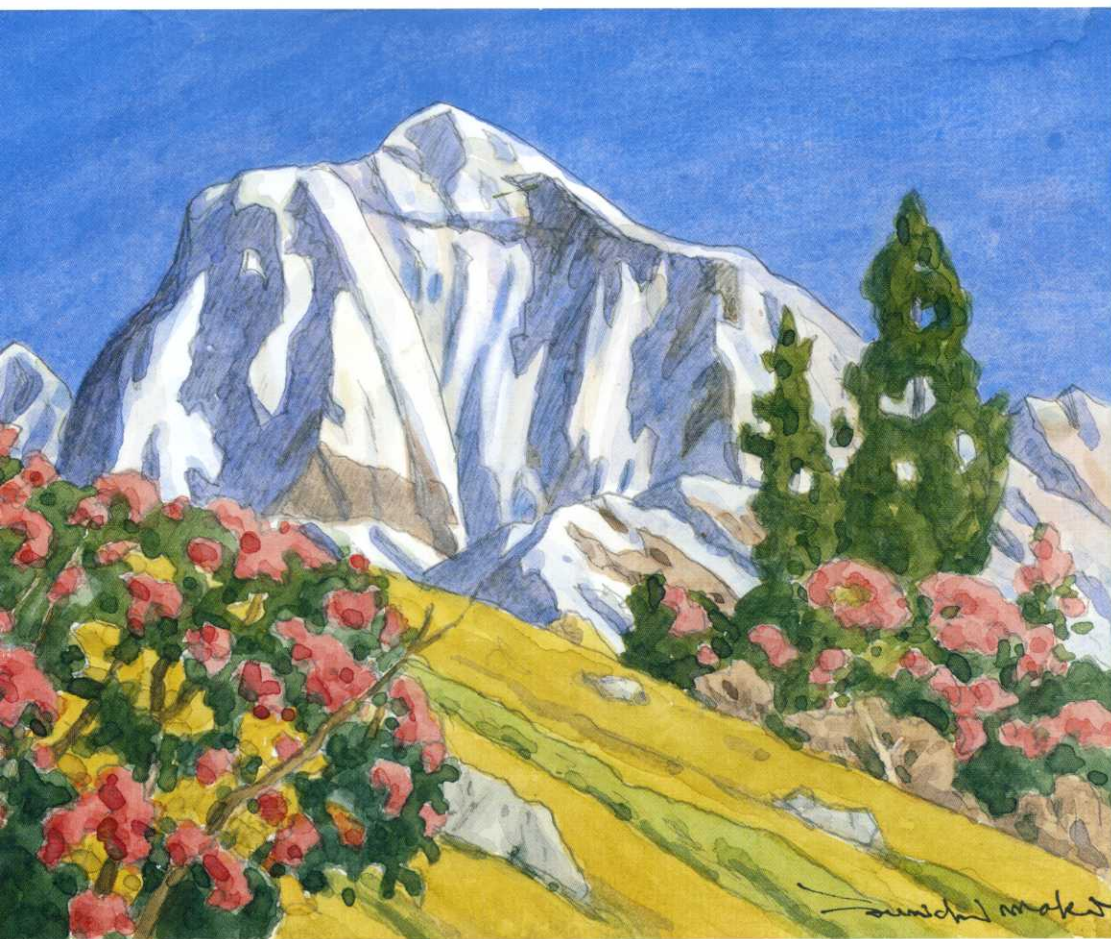
山岳文化

第 9 号

日本山岳文化学会

16日 金
午前
10:00

- 卷頭言◆日本学術会議 協力学術研究団体に指定 徳久球雄
- 記念講演◆登山は最高の元気供給源—登山と恋愛は総合芸術— 大野秀樹
- 検証◆“山の発禁本” 覚え書き (後編) 西本武志
- 随想◆堰堤の見える風景を楽しむ 松尾 宏
- 詩◆小さな旅 水野政雄
- 俳句◆中央アルプス・宝剣岳吟行 筒井照代
- 論文◆ワンダーフォーゲル概史 (後編) 城島紀夫
- 随想◆山の食べ物、旅の土産 寺内丈行
- レポート◆山内作第一号ピッケルのこと 諏訪部豊



岩峰社

◆ 検証 ◆

“山の発禁本”覚書（後編）

西本武志

■ 山本 明「山と人」——次版改訂処分

“聖戦に疑惑を抱かせるおそれあり”と

中国で戦死した神戸商大山岳部OB・山本明の遺稿集「山と人」（朋文堂／一九四二、昭和一七年一月刊）も、内務省の検閲の網にひっかかって「次版改訂」処分を受けた。

同省警保局の発禁記録（註1）には、こう記されている。

〈山と人 山本明 1.15 四六 361 東京朋文堂 一月二

十六日 安 一三頁 聖戦に疑惑を抱かせる虞ある記

事 次版改訂

解説の要もないと思われるが、あえて嘸みくだけば—

「山と人」東京朋文堂一月一五日発行、四六版三六一頁、

一月二六日処分、安寧標準違反。一三頁に聖戦に疑惑を

抱かせるおそれのある記述。次版を出す際は当該箇所を削除するなり、書き改めるなりの改訂をほどこせ」ということになる。いわば「警告」である。全面発禁（発売領布禁止）や削除（問題箇所の切り取り）と比べれば、ごく軽い処分といえよう。

（註1）『昭和書籍・雑誌・新聞発禁年表』下（前掲）

*

「山と人」は山本明が折りに触れて書き記した紀行、山行記録、随想、論文、評論、友人・知人に宛てた戦地便りなどを一本にまとめたもの。田中薫神戸商大教授（山岳部長）と山岳部の僚友・日比野真一、高谷実、友田謙三らが、山本への哀惜の想いをこめて編んだ。カラーの自画像や風景画も数点収録されている。三部構成で三六〇ページにおよぶ大冊だ。巻頭に田中教授の序文、巻末に西岡一雄（大阪・好日山荘店主）の追悼文。山本の絵画の師に当たる足立源一郎画伯装丁の箱付き。戦時下に出た本としては、立派なつくりである。定価二円八〇銭。

目次のうちから主要なものを引いてみる。

・登山と戦争

・戦地便り

・Z大の「蒙疆の自然と文化」を読んで

・父の教訓

・北沢・北岳・亡魂沢

・台湾の山と蕃人

・昔の旅術

・山岳部の行方

・部報論

・ヒマラヤの語源について

・火田及火田民の一プロフィール

いづれも山本明の人となりや、その素養のたしかさを窺うに十分な達意の文章ばかりである。このうちの「登山と戦争」と題する戦地便りは、山本の死後『山小屋』一〇七号（一九四〇・昭和十五年二月刊）に掲載され、心ある岳人のあいだに反響を呼んだ。たとえば―桑原武夫は山本が同文のなかで「登山と戦争とは縁もゆかりもない（文意Ⅱ西本）」と指摘し、当時台頭しつつあった岳界の戦争迎合、戦争協力姿勢に警鐘を鳴らしたことに「登山は」軍事的でないことはいまでもない。戦争が最も目的な行為であるに對し、登山は体位向上のためのよき錬成ではあるが、その本質においては無償の行為に近いものであるから「戦争とは」むしろ反対の立場に立つといえる（登山は戦争に必ずしも直接役立つものではないと、壮烈な戦死をされた少壮登山家山本明中尉が書いておられた）と山本の主張を高く評価している

〔「関西山小屋」一九四二・昭和一七年一月号および「山と高原」同年二月号所載「戦時下の登山」〕。

ここで、山本明の横顔^{プロフィール}を一瞥しておく。

山本は、一九一四（大正三）年三月、東京・品川区大井南浜川町に生まれ、少年期を兵庫県芦屋市で過ごした後、大阪・北野中学、同志社高商を経て、一九三四（昭和九）年四月、神戸商大へ進学。中学入学時に藤木九三らが創設した「RCC」（ロッククライミングクラブ）（註2）の門をたたいて登山の基礎を学び、同志社高商時代には児島勘次（註3）をパートナーに、南アルプスや冬の富士山などを歩き回った。神戸商大では山岳部に籍を置き、三四年八月同部の北朝鮮登山隊に加わって、咸南・安水白山、遮日峰、雲水白山、大岩山、頭雲峰、蓮花山に登頂。一九三五（昭和一〇）年一〇月、北アルプス南岳天狗原で氷蝕岩を発見。田中教授（氷河学）の発案で「山本岩」と命名された。一九三六（昭和一一）年三月から四月にかけて取り組まれた台湾登山のリーダーを務め、積雪期の大甲溪、南湖大山、次高山に登頂した。

一九三七（昭和一二）年三月、同大卒。鐘ガ淵紡績（神戸営業所）に入社。一九三八（昭和一三）年召集を受け、東京歩兵第一連隊に入隊。幹部候補生。同年九月、

仙台陸軍予備士官学校入校。一九三九（昭和一四）年五月、中国北部に送られ、同年十一月、歩兵少尉に任官。一九四〇（昭和一五）年九月五日中国山東省臨沂県青駝寺の西方大官庄付近での戦闘で戦死。享年二七歳。

（註2）RCC／藤木九三らの手で一九二四（大正一三）年六月創立された。

（註3）児島勘次（一九一〇～一九七九）／同志社大山岳部で活躍一九三三（昭和八）年三月、剣岳早月尾根積雪期初登。南北アルプスや北千島、台湾、北朝鮮、中国東北部、大興安嶺などに足跡を残した。一九六三（昭和三八）年六月～二月にかけて同志社大サイパル（ネパール／七〇三メートル）登山隊に隊長として参加。初登頂に導く。著書に『台湾の山』『登山歷程』がある。

■山本 明の勇氣と先見性

では、当局のお気に召さなかった（聖戦に疑惑を抱かせる虞のある記事）とはどんな中身か。当該の「三ペーシ」に目を移そう。槍玉に挙げられたのは一九四〇年三月七日付で西岡一雄に宛てて出した、以下のような「戦地便り」の前半部分である。ただし、山本↓西岡のルートでは問題にされず所属部隊の検閲をパスしていることに

注意。冒頭に「N老兄」とあるのは西岡一雄のこと（傍線・西本）

N老兄

貴老から二月二十六日付の御便りの来る前に、丁度入違つて拙画をお送りしました。只余り支那農夫の姿がよかつたものですから、つい画趣が動いたわけで恥を晒す次第です。

支那人に接してゐると、彼等民族の偉大さがわかります。それは貴老の御手紙にもあつた様に、支那人は世界中で恐らく精神的、肉体的、両方面に於ける最大の苦勞を経験してゐる民です。苦勞を知つた人間程恐ろしく、且つ望みの多いものはありません。支那人は数千年に渡る苛斂誅求と、天変地異に耐へに耐へて来ただけに、計るべからざる底力を有する国民です。「チヤンコロ」などと考える日本人は大馬鹿です。私は日本が支那を占領しても、果たして日本人が支那人を同化させ得るかを疑ひ、逆に其の前に、日本人が支那人によつて同化されてしまふのではないかと危ぶむ者です。（以下、戦争は命の遣り取りであり、所詮登山はどんなに理屈をこねたとこで一種の娯楽だ。戦争と登山とを強いてコジツケたりするのは見苦しい限りだ、

といった意味の見解をここでも強調し、この戦地便りを結んでいる。

現在の目で見ればごく当たり前のことをいつているように映るかもしれない。だが、国を挙げての戦争の最中、敵側の民族を称え、読みようによっては「日本はこの戦争に勝てないぞ」と予言しているのではないかとさえ受け取れるようなことまで書いているのである。これでは、当局の逆鱗に触れるのも当然といえば当然である。そして、結果は山本の見通したとおりになっただけかか今日の日中関係は、山本の予測を見事に裏づけているのではないか。山本の勇氣と先見性に感嘆の念を禁じえない。

むろん、公開を目的としない私信であるから思い切ったことが書けたという見方もできる。しかし、それにしてもし所属部隊の事前検閲は避けがたい。こういう手紙を出すこと自体、相当の覚悟が要求されたはずである。内務省が「次版改訂」などという軽い処分では済ましたのはその内容からみて不思議であるが、その手紙が戦地での軍の嚴重な事前チェックをどうやってパスしたのかの方がもっと不思議に思われる。あるいは山本が、士官という立場を利用して無検閲で出したとも考えられるが、推測の域を出ない。

■ むすびにかえて

—— その他の発禁本 ——

紙幅の都合上、詳述できない山関係の発禁本のリストを以下に掲げておく。

- 浦松佐美太郎／『たった一人の山』（文芸春秋／一九四一・昭和一六年）——登山界出身の情報局文芸課長・井上司朗に、「一億一心の総力戦体制下に「たった一人」とは何事か、と難癖をつけられ、事実上の発禁を食らった。一九四二（昭和一七）年六月に第四版が出ているからそれ以降の出来事であることは確かである。詳しくは平凡社ライブラリー二四〇『たった一人の山』の解説（拙文）を参照されたい。
- スウェン・ヘディン 黒川武敏訳／『熱河』（地平社／一九四三・昭和一八年）——内務省の発禁記録に「日本の皇室用語を訳書に用いた点不穩当なるにより次版改訂。安」とある。安は安寧標準違反である。処分日は同年五月二二日。

● 今西錦司／『草原行』（府中書院／一九四七・昭和二二年）——本書は一九三九（昭和一四）年の第二次蒙古行を紀行風にまとめたもので、敗戦前に世に出るはずであったが、当局の検閲にひっかかり（五一ペ